

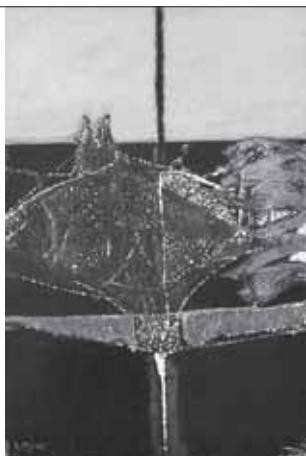
静物へのまなざし

じつと座つてゐることが好き。考へることが好き。冥想する癖。静物ばかり描くのは生来の性癖の為す業かもしれません。(注1)

画業前半は静物画家として、渡欧を経た画業後半は風景画家として、二度の絶頂期を迎えた三岸節子。最晩年に帰国してからは、そのまなざしを再び静物へと向けています。身近なモチーフに愛情を注いだ、節子の静物画を中心に紹介します。

前半期－静物画家として

アトリエの隅にいつも埃を浴びて転がつてゐる壺、皿、籠、花瓶に挿してある枯れた花、花、果物、柿、林檎、葡萄、そしていくばくかの布きれ。毎日わたくしはこれを描きます。(注2)



『かれい』1953年 ©MIGISHI

1924(大正13)年、美術学校を卒業してほどなく、19歳で三岸好太郎と結婚した節子。3人の子を授かり、家事と育児を両立させながらも限られた時間の中で制作を続けました。それゆえモチーフは室内の生活情景に制約され、色彩や構図の試行錯誤により独自の表現を築こうと模索します。1930年代までは明るく淡い色彩世界を描きますが、40年代になると暖色系の限られた色数で生活感の滲んだ滋味を見せるようになりました。次第に描き込まれるモチーフの数も絞られ、華やかな色彩に頼ることのない造形感覚を磨き上げていきます。

1934(昭和9)年の好太郎の急逝も、その後に迎える戦争も、静物画家としての節子の歩みを止めることはませんでした。1950(昭和25)年度には《静物(金魚)》が文部省の買上げ作品となり、続けて《静物(梱子)》で女性画家初の芸能選奨文部大臣賞を受賞するなど、節子自身「静物の時代。最も華やかな時期」(注3)と語る、静物画家としてのピークを迎えました。

転換期－初渡欧の経験

目から感じ、それを表現してみた時代はもう遠く過ぎ去つたのです。近代はもつと精神をむきだしにした、精神そのものの、ずばりでなくではありません。(注4)



『モンマルトルの家』1987年 ©MIGISHI

1954(昭和29)年、節子は憧れのフランスを初めて訪れます。これまで節子に影響を与えていたのは、まぎれもなくマチス、ボナール、ブラックラフランスの画家たちでした。しかしながらいざ憧れの地で節子が感じたことは、西洋の合理主義・物質文明の閉塞感、ルーブル美術館で見た中近東などの原始美術が持つ素朴で力強い生命力に対する感動、そして自身が日本人であることの再認識でした。1年半後に帰国すると、節子は「これこそ日本そのもの」と見出した埴輪をモチーフに、色彩を極めて抑え、太く強靭な線と面による造形美を追求しました。

後半期－風景画家として

静物画家であった節子ですが、1964(昭和39)年に神奈川県大磯町の丘陵地にアトリエを構えてからは、太陽や海など風景に対する関心を深めています。そして1968(昭和43)年、本格的に風景に取り組むため再びヨーロッパに渡りました。1974(昭和49)年にヴェネチアをテーマにパリで開いた個展が大好評を得、1988(昭和63)年には同じくパリの個展でヨーロッパ各地を描いた新作を発表しフランス画壇に確固たる地位を築き、二度目のピークを風景画家として迎えました。節子が風景画で見せた具象と抽象、抒情と造形の調和は、静物画家としての道程を経なければ到達し得なかつた境地と言えるでしょう。

最晩年－ふたたび静物へ

やがていつの日かこの絶えざる努力の集積が結実して、埃を浴びてゐる壺にも、枯れた花々にも、皿にも、果実にも、燐々とした太陽の光を仰ぐやうに、わたくしの自在な境地が成熟を遂げる日を念じてやみません。丁度絵画のうへに神の宿り給ふごとくに。(注5)



三岸黄太郎『静物』1991年頃 ©MIGISHI

1989(平成元)年、節子は20年余りの滞欧生活を終え、かつて“太陽の家”と呼んだ大磯のアトリエに戻ります。帰国後は花や壺などの静物に再びそのままなざしを向け、94歳で亡くなったときには描きかけの花の絵がアトリエのイーゼルに架けられていました。

【特集展示】心象の画家 三岸黄太郎

渡欧以降、常に節子に寄り添い、支え続けた長男・三岸黄太郎(1930-2009)。彼もまた20代前半から本格的に絵を描き始めています。節子を車に乗せてヨーロッパ各地を巡り、節子と同じ景色を見ますが、節子と異なり黄太郎はその場でスケッチをとることはなく、心に残ったイメージを記憶し、アトリエに戻って色彩と造形を極めて単純化した心象風景として再現しました。その詩情豊かでありながら静謐な空気は人物画や静物画も纏い、節子は「私の絵は目を楽しませる。黄太郎の絵は心を樂しませる」(注6)と評しました。

一宮市三岸節子記念美術館 学芸員 長岡昌夫

(注1, 2, 5)三岸節子「静物画家の独白」「花より花らしく」1977年、求龍堂、14~21頁

(注3)林寛子『三岸節子 修羅の花』1989年、講談社、190頁

(注4)三岸節子「日本への訣別」「花より花らしく」1977年、求龍堂、97頁

(注6)三岸節子「日記」1978年10月12日/73歳「没後10年 三岸節子展 心の旅路—満開の桜のもとに」図録、2010年、朝日新聞社、157頁